

コラム 53 — 通州事件

1937(昭和 12)年 7 月 29 日、北京の北東 20 キロに位置する通州で、反日共産分子が日本軍の隙を見て日本人居住区を襲撃するという事件がありました。

通州は、冀東(きとう)防共自治政府の中心をなす町で、冀東政権は、1 万以上の保安隊を有しておりました。この保安隊の中の反日共産分子が、日本軍が空になるのを見て、日本人居留地を襲撃し、現地の日本人 385 人のうち、幼児 12 人を含む 223 人が虐殺しました。殺し方はすべてが、済南事件のように猟奇的で、中国伝統の虐殺の「作法」でありました。中国人が日本人を虐殺した数多くの事件の中でも、その凄惨なることで通州事件を凌ぐものはないといわれています。

当時、天津歩兵隊長で、7 月 30 日午後邦人救援に当たった萱島高は、東京裁判で次のように現場の状況を証言しています。「旭軒(飲食店)では、40 から 17~18 歳までの女性 7, 8 名が皆強姦され、裸体で陰部を露出したまま射殺されており、そのうち、4, 5 名は陰部を銃剣で突刺されていた。商館や役所に残された日本人男子の死体は、ほとんどすべてが首に縄をつけて引き回した跡があり、血潮は壁に散布し、言語に絶したものだ」